

聞名仁教

第 192 号 毎月発行
(発行日) 2026 年 9 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutsuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)
記号・番号 17810-7-259431

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

地獄と極楽の岐路

佐々木蓮磨

に対するバリザンボウ
が拝まれてくるのを覚
えます云々」といつて
おります。ことに最後
には「私は千人に一人、

二カ年三ヶ月の間、世間を
騒がせ、捜査当局を悩ませた
吉展ちゃん殺しの犯人小原が
遂に捕えられ、犯行のすべて
が明るみに出たのでありまし
たが、この凶悪犯人に関連し
てわれわれを教えてくれる数
々の教訓があるように思いま
す。

まず犯人小原の過去半生は、
まことに憐れむべき運命に奔
ろうされてきたようです。小
学校時代は、最初は成績も優
秀であったようですが、九才
のとき破傷風に罹り、それ
が原因でビッコ(注)になっ
たところ、学校では嘲笑を受
ける、家庭では厄介者扱いに
されるといった有様で、孤独
感が深まり性格は憂うつ性に
陥り、暗い方向をたどったよ
うであります。その後、時計
修理の見習工となって住み込
んだのでありましたが、店が
しまった後は独り室に閉じこ
もってションボリとしておっ
たということでもあります。

この孤独感と劣等感とが遂
に彼を自暴自棄の道に導いた
ようです。しかし、もしこの
とき良き指導者と激励者とが
あったならば、彼はおそらく
ズバ抜けた宗教的信境に到達
したことであろうと思われる
のであります。「仏魔一紙」と
いうことばがありますが、仏
になるか悪魔になるかの境い
目は、全く紙一重のところだ
でしょう。一步の踏み出し如何
で仏と悪魔とに分かれるよう
です。もし孤独感と劣等感に
陥っている小原に対して、よ
き指導者と激励者があつたな
らば、彼はスバラしい宗教的
信境に転入したものでありう
と思われるのであります。

『若き求道者の手記』で知
られた青年長谷川次郎は、孤
独と病苦と性格の弱さ、それ
に親族の嘲笑まで浴びて自暴
自棄に陥り、自殺を決意し
た途端、はからずも倉田百三
氏の小説『恥以上』を読んで
自殺を思いとどまり、同氏の

名著『絶対的生活』に生き抜
くヒントを得て、はるばる新
潟から東京に走って同氏の病
苦超克の体験を聞き、いよいよ
苦難のドン底に一縷の光明
を見出し、遂に清沢満之師の
「我信念」によつて最後の安
住を得たのであります。

彼が二十八歳で往生する直
前に、私に寄せた手紙の中に
「私は自分の病気が不治であ
ることを知らせてもらったこ
とをこのうえなく喜んでい
るか」「只今の私にはこれだ
から楽しい、あれだから嬉しい
というものは一つもありませ
んが、そのなかに限りのない
喜びがあります」といい、ま
た「病苦に苛まれて絶え入
るばかりになったとき、自分
に対するバリザンボウ
が拝まれてくるのを覚
えます云々」といつて
おります。ことに最後
には「私は千人に一人、

《秋季彼岸会》

九月二十二日(火)

午後二時始まり

法話

念佛寺住職

文責土井。

清沢満之先生に学ぶ

17

議の雲霧を望見
すべきのみ。

これ吾人が進
退共に絶対不可

八月号からの続きの清沢

満之先生の『我信念』の一
文を引用いたします。

なつた所で、一切の事を挙げて、悉く之を如来に信賴する、と云ふことになつたのが、私の信念の要点であります。

信念には、私が一切のこと

に就いて私の自力の無功なることを信ずる、と云ふ点があります。此自力の無功なることを信ずるには、私の智慧や思案の有り丈を尽して、其頭の挙げやうのない様になる、と云ふことが必要である。此が甚だ骨の折れた仕事でありました。其窮極の達せらるる前にも、随分、宗教的信念はこんなものであると云ふ様な決着は時々出来ましたが、其が後から後から打ち壊されてしまつたことが、幾度もありました。論理や研究で宗教を建立しようと思ふて居る間は、此の難を免れませぬ。何が善だやら悪だやら、何が真理だやら非真理だやら、何が幸福だやら不幸だやら、一つも分るものでない。我には何にも分らないと

思議の妙用に托せざるべからざるゆえん。
ただ生前死後、しかるのみならんや、現前の事物についても其のダス、ワス（何か）、デス、ワルム（なぜか）に至りては、ただ不可思議というべきのみ。

ここで清沢先生は、ご自分に起こつた信心は、自分の能力が「一切のことに對して無力である」ということを信じる点があるといつています。ここで「一切のことに對して」とはどういうことなのでしょいか。それについて先生が三十五歳の時から書き始めた『臙扇記』という日記に、こういうことをいっています。

いかに推考をついやすといえども、いかに科学哲学に尋求すといえども、死後（展転生死の後）の究極は、到底不可思議の関門に閉ざさるものなり。

あに死後の究極しかるのみにあらず、生前（生まれる前）の究極もまた絶対不可思

ここで先生は、どれだけ考えても死して後、私は結局どこへいくのか、全く不透明で分からない。死後もそうだが生まれる前、一体どこから私は生まれてきたのか、その元がわからない。それはちやうど雲や霧に覆われて、前も後ろも見えないようなものである。生前死後だけではない、実は目の前の事物が、「それが何であり」「どうして存在しているのか」「さっぱり分からない、といつておられます。実際、そうですね。私たちは自分が一体どこから生まれ、死してどこへいくのか、まったく分からない。

自分の存在が自明のように思つていますが、実際はどこから来てどこへ行こうとしているのか、何も分からない。分からないということも問題にしないで生きている。そういうあたかも雲霧に囲まれて先も後ろも見えないような状態である。にもかかわらず、この世も人生の事も分かつたつもりで生きている。しかし、本当は全く無知のまま、無知とも知らず生きている。しかも生前死後だけでなく、目の前に咲く花一輪も「これが何であり、どうしてこういう存在があるのか」分からぬ。目の前の人も自分も、これは一体何なのか、何によつて成立しているのか。考えたらず全く不透明であり不可思議である。そういうことを考えると私は不思議だらけの中に生きている、不可解のまっただ中に生きている。しかもこんなことを考えている自分自身が一体何ものなのか、それがそもそも分からない。どれだけ考えても分からない。私はまったく無知無能であ

るといわれるのでしよう。そのことをここで、「私が一切のことに就いて私の自力の無功なることを信ずる」といわれるのでしよう。そういう無知無能の自分にぶつかつて、「此自力の無功なることを信ずるには、私の智慧や思案の有り丈を尽して、其頭の挙げやうのない様になる」ことが私（清沢先生）にとつては必要であつたといわれます。自分の思案を尽くして考えても考へても分からない、まったく私は無知無能であつたと「頭のあげようのないようになつた」といわれるのです。

それは自分の存在や事物の存在が何であるかという問題だけではなく、宗教的信念のことについてもそうであつたといわれるのです。真宗では「信心が一番大事である。信心ひとつで助かるのである」といわれてきました。その浄土真宗の信心について、先生は考へに考へ尽くしていつたのです。ことに清沢先生は宗教的な

信念、浄土真宗でいう真実

の信心を確立すべく努力されたのです。先生は哲学者でもありますから、宗教的な救いとは何であるか、人間を救う仏とは何であるか、救いはどうして自分に実現するのかなどを、ただ教えられたままに信じるというような道を通らず、まず真宗の信心を自分の知性でもって論理的思想的にはつきりさせようとされたのでしよう。ずいぶん思案・思考を重ねられ真宗の信心は何であり、救いとは何なのかなどを考えに考えてきたのです。時にはこれでよい、これではつきりしたなどと決着がついたかのように思っただけでもすぐに壊れたりました。そういう事が何度もあつたとのことでした。

このように自分の知性でもって信心をはつきりさせようと考え尽くしてきたが、それによつてはどうしても信心を確立することはできず、幾度も崩れたのでした。「論理や研究で宗教を建立しようと思ふて居る間は、此の難を免れませぬ」とい

われるのです。

こうして「何が善だやら悪だやら、何が真理だやら非真理だやら、何が幸福だやら不幸だやら、一つも分るものでない」となつて、全く無知無能無力な自分にぶち当たつたのでした。そして「我には何にも分らないとなつた所で、一切の事を挙げて、悉く之を如来に信頼する、と云ふことになつた」といわれるのです。何もわからなくなつて、「悉く如来にする」というのはどういうことでしょうか。

それは先ほどの清沢先生の言葉の「絶対不可思議の雲霧を望見すべきのみ」といわれた『朧扇記』の文章に引き続いて、先生は、

四顧茫茫の中間に於て、吾人に亦一団の自由境あり。自己意念の範圍即ち是れなり。自己とは何ぞや。是れ人生の根本問題なり。

自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して、任運に法爾に此の境遇に落在せ

るもの、即ち是なり。

といわれています。四顧茫茫のまつたく何も分からなくなつた足下にすでに与えられている、直下に恵まれている自分の全体的な居り場を見いだしたのです。そこに本当の自由があり、自由境があつたのです。

絶対無限の妙用（はたらかき）にすでに乗せられ運ばれて今、「ああじゃこうじゃ」という前に、今ここにちゃんと置かれている、落在せしめられている自己を発見したのです。そのように絶対無限の寿命無量の仏によつて今ここでちゃんと抱かれてゐる自己にであつたのであり、この阿弥陀仏に身を委ねたのであります。そのことを「一切の事を挙げて、悉く之を如来に信頼する」といわれるのです。こういう清沢先生のような道筋はだれでも通れる道ではないでしょうが、どのような人も真宗の信心をいただくとなると、それぞれなりにどういう経路を通る

うとも、自分の力では自分の宗教的な問題（人生の一大事）の解決は不可能であるという限界にぶつかからざるを得ず、そこにおいて阿弥陀仏の仰せである「そのままなりで引き受ける」という大慈大悲のお心が届くのでありましょう。（了）

お文の神髄

蓮如上人は『お文』をたくさん書かれ、それによつて多くの人を真宗の救いに導かれました。そこで上人を「ご再興の上人」と讃えられています。では蓮如上人の教えとはどういう教えだったのかを述べたいと思います。そこで上人の教えの肝要が一番よく説かれている『お文』第四帖十四に「一流安心の体という事」という文章がありますので、それを解説して上人の真宗信心の内容を尋ねてみたいと思います。

一流安心の体という事
浄土真宗の信心の本体、本質・実質はこういうことだよという題となつています。

南無阿弥陀仏の六字のすがたなりとしるべし。この六字を善導大師釈していわく、
「言南無者 即是帰命 亦是発願回向之義 言阿弥陀仏者 即是其行 以斯義故 必得往生」といえり。

信心とは南無阿弥陀仏の六字に表されているおこころを知ることです。この六字について善導大師は次のようにいつている。（南無というはすなわちこれ帰命、亦これ発願回向の義なり。阿弥陀仏というはすなわちこれその行なり。この義をもつての故に、必ず往生を得）と。

まず「南無」という二字は、すなわち帰命というところなり。帰命というは、衆生の、阿弥陀仏後生たすけたまえとたのみたてまつるころなり。

住職雑感

コロナ以後、遠方に法話にでかける

ことはほとんどなくなったが、今年十一月三日と二四日に金沢市内の真宗大谷派・名聲寺様（電〇七六二・六七・〇六六八）の報恩講に出かけることになった。

両日とも午後二時始まりである。また「親鸞仏教オンライン講座」で「真宗の構造とお念仏の救い」と題して六回お話しすることになった。第一回は十月二十日、

午後七時半からである。何人かの講師さんが話されることになっていて盛りだくさんである。会費は全講座で一二〇〇円である。今年十月から明年三月までの

期間である。申し込みは「親鸞仏教オンライン学舎」をHpで検索すれば詳しいことは出ている。お寺に参って来れる高齢者は元気な人や暇な人に限られる。高齢者でも年金では生活が苦しいこともあつて、近年は七〇歳を過ぎて働いている人も少なくない。その点オンラインでの

説法はだれでも家で聞くことが出来る。しかも夜の時間帯に為されることが多いので、視聴しやすい。ただし、真宗の聞法は説法の人と実際に面と向かって聞くのが一番望ましいのは言うまでも無い。

といつてもなかなかそうはいかない事が多いのが現実なので、こうしたオンライン法話はこれから大いに活用すべきだと思われる。

こ」と簡明に説かれています。

以上の内容の説教が以前からよく行われていたことは、著名な信心の書『信者めぐり』に信心の名師で美濃の国にいた仏照寺老師というお方の説教に次のようなお話が掲載されていきますので参考までにここに引用しておきます。

今南無阿弥陀仏と云ふ、きまりのついた法が聞こえて、往生は願力の不思議で定めて下さると思ひ取られたら、思ひとらにやならぬと力む世話なしに。ただ南無阿弥陀仏にて往生と、得心する外はない。南無はたのむ機の方、阿弥陀仏は助け給ふ法の方、機法一体ぢや。今南無と云ふはたのむ機の方、たのむ機とは仏になる機ぢや。仏になる機が胸にあるか、あるまいがのう、そこで大悲の親様が、無いと見込んで仏になる機のない奴に、なる機を南無の二字に、なる法のなき奴に、なる法を阿弥陀仏の四字に、機も法も六字に成就して下された相が、機法一体の南無阿弥陀仏ぢや。

（了）

機法一体の南無阿弥陀仏ともうすころなり。

この道理あるがゆえに、われら一切衆生の往生の体は、南無阿弥陀仏ときこえたり。あなかしこ、あなかしこ。

こういうわけで、この「南無」の二字は、他に救い無き者が弥陀のお助けを疑いなく信ずる機（心・者）のことであり、また「阿弥陀

仏」の四字は、その信ずる機を摂め取って助けてくださる法であつて、この機法の二つを如来法蔵様はすでに成就してくださつて、すなわち弥陀をたのむ信心すらも成就してくださつてい

て、その恵みを南無阿弥陀仏の名号で喚びかけて私たちに知らせてくださる。そういう思ひ召しです。こういう有り難い道理（すじみち）が南無阿弥陀仏には具わっているから、一切衆生が往生させていただくことは「そのままなりでタスケ

ル」という南無阿弥陀仏の六字の仰せを聞くばかり、そのほかにないもののです。「あなかしこ」あなかし

また発願回向というのは、たのむところの衆生を、摂取してすくいたまうころなり。これすなわちやがて「阿弥陀仏」の四字のころなり。

南無というのはアミダ仏の大悲の命（本願の仰せ）に帰するということ帰命という。この帰命という意味は、アミダ仏の「汝をまるまる引き受ける」という本願の仰せを聞いて、「そう

いうことでしたらどうぞ後生をおたすけくださいませ」とお任せする心です。

また「発願回向」というのは、アミダ仏が一切衆生を救おうという願を起こして、弥陀の仰せに信順する衆生を摂め取って救いたもうおこころである。これはそのまま「摂取して捨てざれば阿弥陀となづけたてまつる」で「阿弥陀仏」という四字のおこころです。

（「やがて」——そのまま・このまま）

さればわれらごときの愚痴闇鈍の衆生は、なにところをもち、また弥陀をばな

にとたのむべきぞというに、もろもろの雑行をすてて、一向一心に、後生たすけたまえと弥陀をたのめば、決定、極楽に往生すべきことさらにそのうたがいあるべからず。

であればわたしち愚かな凡夫は、どのように心得たらいいか、またどのよう

に阿弥陀仏のお助けにお任せすればよいかというと、難しくはない。我が身の救いについては本願の「タスケル」という仰せ以外の事をまつたくたのみにせず、一筋にふたごころなく、私の永遠の行く末については、弥陀の本願の仰せられる「そのままなりで引き受ける」という大悲の願力にお任せすれば、かならず極楽に往生させてくださること「間違ひなし」と、うろうろしないことである。

このゆえに、「南無」の二字は、衆生の弥陀をたのむ機のかたなり。また「阿弥陀

仏」の四字は、たのむ衆生をたすけたまうかたの法なるがゆえに、これすなわち

機法一体の南無阿弥陀仏と

もうすころなり。

この道理あるがゆえに、われら一切衆生の往生の体は、南無阿弥陀仏ときこえたり。あなかしこ、あなかしこ。

こういうわけで、この「南無」の二字は、他に救い無き者が弥陀のお助けを疑いなく信ずる機（心・者）のことであり、また「阿弥陀

仏」の四字は、その信ずる機を摂め取って助けてくださる法であつて、この機法の二つを如来法蔵様はすでに成就してくださつて、すなわち弥陀をたのむ信心すらも成就してくださつてい